

七金譯說附錄

大槻玄洋  
自筆稿本

重文

洋学文庫

文庫 8

A 27



特

118

79

文政三年庚辰十一月

大槻文庫

七金譯說附錄

七金譯說附錄



馬場貞由 佐十郎

大槻茂實 玄澤

譯校

亞鉛

羅甸名レンモト 和蘭名レンモト

此物金質ありて硫黄氣あり色鉛の如し其  
體質重して堅実なり火よりを熔化し湯  
物れとも打延しうらく又碎けしうらく火中  
投する時煙を化して消滅するものなり

昔時の人の此物を知りて故に世にあり  
くも考究をなすものなりしを以て其の  
多し體格をも明くものなりし但し其  
タールと云ふ人の著る金鐵福の中一  
詳載せり

ゴスラールといふ地の鉛山より出たる金貨  
うして清灰を以て容易に熔化し得し其形  
状恰と本銀と細く刻たるとの如しぬら  
ふより鉛を以て又假鍮を以て

用ゝ所のポドニアホルナ火

の二種を以

て亜鉛を鉛と糖とを電を造るの法

電二方ハ瓦状にて造りて造る前に火口の  
盤石一拾枚程の厚のものをして挿し用ら  
るる式の如く鞆を設けられしを以て其  
る氣を以て冷却せられし尚ほ其を以て  
湯熱なるものをして其を以て

鞆を以て火を熾し亜鉛を熔けしと凡十二時

し其灰雜より鉛氣重底を沈着して重  
鉛の重底のほろは所着し其形粘膠液  
のしき強んと碇よれしきるるに相離れあり  
初のしき重鉛重底より着るを立ちし同際を  
るに炭灰をわしよれしきるるに又新  
めを入れ換へし火に挿し鉛の内の  
しは紙紙と灰摺の者を交雜したる物に  
とらかりおろし焙化しそしきるるに重底  
の炭灰を挿ししきるるに木炭細末を

たり物を細くしきるるに重底のしきるるに重鉛  
と少程を以て炭粉の中に入れておろし  
きるるに炭灰をわしよれしきるるに  
まじり熱せしきるるに其形を熱し  
の重鉛は熔けしきるるに鉛の者を光亮を現し  
白色の火をとりおろししきるるに炭  
末を収りしきるるに時白灰をとりおろし  
速に炭粉のゆきしきるるに鉛を減し  
そしきるるに金質の物鉛をとりおろし

之は着や、炭素を以て清くし、その  
別器へも再び火よりして鉛を溶化さ  
せ、その一し、而して後塊となし、鉛を  
作らば、その一し、

。亜鉛の  
は、法の火候を因り得るもの多きを定むるは、  
法よりして火候の弱きよりして、又、  
鉄の、あれ、電の、何れ、  
法よりして、火候の、  
法の、亜鉛を、

△即爐  
眼石

附着するものあり、そのを、  
あつちけて、カドニア、  
相を、  
放冷し、  
その、  
カドニア、  
カドニア、  
カドニア、

ついでに其の相をわし假鍮で和らむる功  
用はさうある同名とある事とありて  
け和らぬ様よりよく電燈を沈着する  
亜鉛の電氣をしと鍮子のやうに思ひ考へ  
たれども此鍮肉よりも亜鉛と金とを  
ホムベルグとらふ人亜鉛の金質よりして確  
と乳ある事とこの理を以て先亜鉛  
と堪堀の細もく電光をこれに煙を發せし  
とあり又これを磁棒を以て拌かきまぜす時

火を發して白色光を發するものなるは堪堀  
の物 線條とある事とありて線條とありて  
再ひかきとありてとれは尚又線條を生し  
たものも 數通りありてその名は線條  
代をよぬを在けて線花とありて此線花より發せ  
た油とありてものとありてとホムベルグの  
亞鉛花功能 ありて吐下發汗の功あり 腹を六  
釐強より一分を強發するもの 外用はホムベルグ  
ユヒルアルの主な能よりありて 痰を乾燥



し痛苦を覺えずして予愈せしむるを以て  
又バルツテといふ人の醋鷹と云ふ水を以て生ずる  
オフタルミアオハルミア 眼 痛の此物を玫瑰水と云ふを以て  
醫つて其効を有せりと云ふ又テツケルといふ人の  
乳頭破裂の病を用ひて其効ありといふ又エ  
ニマヨールニマヨールと云ふ人の長病の破腫を用ひ  
し其効ありといふ又此物を細事を以て金創  
を治するに乾し又皮膚癩に棉布を塗り  
し其効ありと云ふ又遠く人愈といふ也

亜鉛と銅と煉合して上品の假鍮或ハ金箔を  
造るは其法也 此法は金箔の法也  
中より其法 此法は金箔の法也  
と云ふと云ふ其法 此法は金箔の法也

赤金 廿四錢 亞鉛 四錢 右二味先赤  
金を坩堝に細く銕化し後つて亜鉛を以  
ての投し融解せしめ冷定て純金色  
となりし打てて其法 此法は金工の  
法也 金を用ひて其法 此法は金工の  
法也

五二五鉛を用ひて錫を純くしむるを  
錫の 錫 二百斤より五二五鉛一斤を加  
はしむるを準とすなり

五二五鉛ト 羅甸 未詳

此物體質銀に似たりヤセシ 銅及其他の金山  
より産するコバルト石と名づくる夾雜して此を  
あきつるれを錳化と名づくるは 錳の 錳  
物中の金を抽出せしめておきしむるは 錳  
又錳造の用にも充てられしむるは 唯鍛工等  
諸金煉煉化ししむるは 錳の 錳  
なりと此物の白銅と名づくるは 錳の 錳  
用しむるなり

響音銅

和蘭 コロックス 弁入 拂郎 紫ブリス ともなく

は物ハ銅と鉛と交和せし金なり 鈴 銃 砲 銃  
或ハ肖像或ハ白きを鑄造せるの料なりこれ  
と云く 石等の物を造るは年月の久し  
鑄てしききくもなり 但 銃 銃 砲 銃 白  
きを造るは鉛の分を造るはくうの  
軟く成りく 破壊し易き故なり 銅 百斤  
百斤の鉄の法を 銅 十二斤 鉛 百斤  
の定を造るはくし 鉛の分を造るはく  
の定を造るはくし 鉛の分を造るはく

加鉛

加鉛のものとノニール と名く 又 亜鉛 白  
銀と加のものとあり 物と云く 其の金質  
柔軟なるなり 其れを以て 銃 及 銃 砲 法  
と云く 其れは 其れなり 其れなり 其れなり  
用と云く 其れなり 其れなり 其れなり 其れなり  
加用と云く 其れなり

○ コーニゲ ワーテル 水 王水 と 譯す 羅 回 水 多  
ステルキ ワーテル 水 強 極 の 一 種 として 金 銅 鐵 を 溶 化  
するのめなり 錫 水 銀 鉛 及び 其れを用つて 溶

化しつゝ銀と銅のくはるは溶化せしむる  
金工と銷鍊家等よりし水法用ふ甚遠  
法教種あり種といふもその良法とて若  
を指しつゝる者

膽礬 二分 硝石 貳分 食鹽 五分 右共攪  
白い鐵をよ細い陶甕<sup>テラコッタ</sup>年と掩ひて甕<sup>カマ</sup>の  
端より蒸気のほは層と接してこれと受けぬを  
甕と鐵をよとの合はのほ圍とつゝ圍<sup>カマ</sup>し  
右の層の蒸気は接するを成固く蒸気は

あつゝる者或のあつゝる 而して右よりよや  
漸くつゝる層は中割をいして逐列の極  
細くつゝる字法よりぬれぬれ蒸氣の  
粒を何層中よ備ふるにぬれぬれを以て  
坪をいふ層は後を冷やしてよれぬれ  
ゆきつゝる層は極細なるなり法のとて蒸氣  
しつゝるのほを極細のほの坪と冷や中  
後してつゝる冷やしてこれより他のほ  
をよ極しぬれぬれ時 粒割の上の王水

と痛まざる精を成すなり

又スズルキワールテルより再び食塩を加つて蒸餾

しつゝ又は食塩精を以て硝子を加へ蒸餾

しつゝ亦同く王水を以て加へしつゝ又

スズルキワールテル一斤よ 硝石十斤 鐵或硝石

食塩十斤 鐵或食塩精よ 硝石精露 二三錢

加へしつゝ亦偶々王水を得しつゝ亦亦通用

スズルキワールテル四分よ 硝石一分

を加へたるものなり

スズルキワールテル 此は強猛水と稱す羅甸

強猛水と云ふもの蓋硝石本性の酸収氣

あるなり故に諸物と溶解すに性酷

烈なりと云ふその名を以て其の用許多し

しつゝも金銀匠及鑛銅工の用す其利名

法に在るなり

スズルキワールテル製石方

勝石 燒けて白く

硝石

二分

七分

本味 携也 甚云 乃 確 田 語 又 〇 〇 〇

右二味攪を勻し土瓶の蒸毛瓶の中は細かくし  
そのものを分けて置し而してこれを「テリフ」テ  
リーへ「ホルノイス」（ハールゲールデオ、ハルゲル、大徳寺後刻にまゝの  
リーへ「ホルノイス」）を名固まりをなす。

のころあし法のとて粘毛瓶を受るの解を接をむ  
うへにせん全量を相意の固固すして始め又大  
くして清く別を置く。此の蒸氣平調のめ  
る。成則として、右のめくして蒸留して  
つる其の種を冷めゆり後、而後其の瓶の中を  
研ぶの蒸毛瓶に挿してしめをあるる粘毛瓶を  
する。此の蒸毛瓶に粘毛瓶の粘毛瓶に挿してしめを

ステンチワイヤに  
強種水と数種の細巧な供用とをなしてその  
交易一箱の品とす。右のめくして蒸留して  
俾るにや。蒸留器具のめくして蒸留して  
容易くめくして右のめくして蒸留して  
右のめくして蒸留して蒸留の器具は  
よく造り、此の年を陶器をなして、右のめくして蒸留して  
鉄を添へてしめをなして、右のめくして蒸留して  
樽器硝子瓶より細末とせざる物、此の蒸毛瓶の中  
へ蒸留してしめをなして、右のめくして蒸留して

銀と水混とを熔化するの用ありては、  
らぬものも分れば、略おるに、烈火を以て急  
速に製煉する、故に、腔釜中の合金、金、銀、  
硝石中、含有する、塩化の酸、水素を共々蒸餾  
し、且、新炭より夾雜する、の異質を、  
と、おわけて、その中、混濁する、を以て、  
その、を、  
その、  
し、  
と、  
と、

硝石と純粋の、

先、銀とを、  
その、  
乳汁と、  
催して、  
その、  
た、  
熬、



右の精しやくのちにて溶化せし後のちを投じし  
て糖と硝子の理に依りて糖若し石中に於  
てし所の酸収氣のそとより、の北きた候分りおれ  
銀、硫、氣を收斂糖串、又酸氣、硫を糖  
化せしと候とて、この分りはかりある糖水  
中に右糖水を投じしと、中煙を記  
し、この分りは硫、氣夾雜せざるの身みを  
けり、是れを投じし、右のちとて銀ありを投じ、茶  
平を止し時、硫、氣含み、除く、糖の糖を投じし

精動するさすすの糖あり、右の銀ありを這すの糖  
あり、是れ糖と純粹のものを擇み、てし時、糖を  
さするを時、いふ名、糖を、糖水中より、片の  
紙を採りて糖化せし、右の紙、代り用ひて、片の  
糖片を採り、是れ糖片を、右のちを投じ、砂糖を  
し、右のちを、糖を、てし、右の糖あり  
し、糖を、てし、右のちを、泡を、生じ  
て、右のちを、てし、右のちを、糖、及、食、糖  
を、糖化せし、右のちを、糖、及、食、糖

等の酸氣を和しあせたる白銀と混  
和せしめを以てしるは酸銀汁のまじりたる  
ものなり其物の性質は投入する所の銀は酸  
類に溶化せしむるあることをはるる水を海邊  
に石際のおもを除去しりし新し銀を以て  
再行してしめたるものなり其高酸汁  
を以て考へしものは又銀を以てしりし  
酸氣を去りて其のまじりし純粋なるもの  
なり

右の酸を以てしるは酸銀汁を沈着し白  
末とすなりし銀をそのまじりしを以て其  
とすなり其物の性質は投入する所の銀は酸  
類に溶化せしむるあることをはるる水を海邊  
に石際のおもを除去しりし新し銀を以て  
再行してしめたるものなり其高酸汁  
を以て考へしものは又銀を以てしりし  
酸氣を去りて其のまじりし純粋なるもの  
なり

一種のステルキワールを割るの法

種水 一オロト 食塩 五割

右の味を蒸す紙箱に入れあちあちして蒸留し  
あり整しそくそくありしけ割るを以て好  
の露水の水銀をぬりく「ナリキスルベル」  
「ス」或「ナリキスルベル」ペレシター「ス」  
を以て作れり者此はそれの酸液  
以て知れりもの送徹してあるなり

強猛水は銀を溶化し王水の金を

溶化するの論

古人從來種々して猛水何なる特<sup>い</sup>銀を  
溶化し又王水はよく金を溶化して銀を  
溶化しそくそくを以て今もあつて後人  
其理を考へし其の種同なる應を考へるもあし  
余熟々しく其分別を論辨せんとして考思  
し先づ萬物自物の體質成り四等の  
一大理ありしを此會得よるなり

其一

凡糸物の體質所謂凝定質の令行令行系

梅一元行の核累して同際なるやとれる事無量名アキ

樹塵衆より集合凝定して體質を考ふが故なり

質を考ふものなり

其二凡體質中無量の計眼あるを他

の諸物名物のに等しきとして大小巨細を考ふ

其こ金質のものに針眼あると他の

諸物を以てればは許多なり

其四他の諸物に目を想うつこと流質

の若し中より有りしは終ひ抱擁して

自ら固定す

吾人先け四大理を令のすしはれを發成

して黄金の針眼白金の針眼より細小

なるを成脱解してしはれよ金に至重し

して銀の粒しはれよ黄金の體質の

堅剛充實を極むといても必ず針眼あるなり

其の御ハ金の空を考ふに内なる成脱

攪カキマゼあるをこれを成脱と記す

鉛の點滴をなすに銀と鉛の針を  
測り其徑り大小の差を或とす其の  
故に金の針を射入る所の細質は  
銀の針を射入る所の細質は  
倍多し其の差を或とす其の  
ものは鉛物を溶化せしむるに  
其針を射入る所の氣を射入る所の  
射入る所の餘り亦少く其の針を射入る所の  
多し自ら其の流をなすなり

極水の膽礬硝石を以て煮し王水の如く  
硝砂を加へるの差を或とす其の  
海鹽を氣ありて其の氣を黄金の氣を射入る  
その栓をなして金を固定の部を合挿して  
流動質と化せしむるに其の針を射入る  
以て其の差を或とす其の針を射入る  
を流通せしむるに其の針を射入る  
能くその如く  
右の如く固く其の針を射入る所の氣

金の針れりしはさぬは六つとて又金を  
溶化しよものは限の針れりしはさぬは六つ  
とて今何と分ぬは金の針れりしはさぬは其  
管最宜して針れりしは極て細しなり

ウツテトムバク白たんのの製法

此物ハ人巧金一種の名物として色限の  
と一即ち銅と礬石を用いて製せり

其方

銅 三枚五錢 礬石 四錢

消石 白堊土の二味を石灰汁と和して煉合で煮る  
そのとれりしを飛散せしむる

右二味合しほまじりて熔化し  
そのものを流しし灰土の層の間に  
入ししをすしし後熔化しし後  
そのものを流しし灰土の層の間に  
入ししをすしし後熔化しし後  
又そのものを流しし灰土の層の間に  
入ししをすしし後熔化しし後  
又そのものを流しし灰土の層の間に  
入ししをすしし後熔化しし後

堀<sup>くわ</sup>。硝子細末<sup>くわ</sup>。或は消石灰<sup>くわ</sup>の許を加へて  
鎔化<sup>くわ</sup>せし。又砂<sup>くわ</sup>。銀<sup>くわ</sup>。或は令<sup>くわ</sup>の  
ことある時は其の白<sup>くわ</sup>也と名<sup>くわ</sup>す。其<sup>くわ</sup>を以<sup>くわ</sup>て  
事<sup>くわ</sup>をし。

又法

紙<sup>くわ</sup>將<sup>くわ</sup>細<sup>くわ</sup>を紙<sup>くわ</sup>板<sup>くわ</sup>となす者

半<sup>くわ</sup>おし

硝<sup>くわ</sup>砂

硝<sup>くわ</sup>石

酒<sup>くわ</sup>石<sup>くわ</sup>塩

各<sup>くわ</sup>四<sup>くわ</sup>錢

升<sup>くわ</sup>末<sup>くわ</sup>丹

壹<sup>くわ</sup>五<sup>くわ</sup>錢

右<sup>くわ</sup>を煉<sup>くわ</sup>回<sup>くわ</sup>堀<sup>くわ</sup>堀<sup>くわ</sup>細<sup>くわ</sup>れ種<sup>くわ</sup>火<sup>くわ</sup>を鎔<sup>くわ</sup>化<sup>くわ</sup>す

右<sup>くわ</sup>の如<sup>くわ</sup>く掘<sup>くわ</sup>回<sup>くわ</sup>鎔<sup>くわ</sup>化<sup>くわ</sup>せし時<sup>くわ</sup>銅<sup>くわ</sup>色<sup>くわ</sup>を呈<sup>くわ</sup>して  
銀<sup>くわ</sup>粒<sup>くわ</sup>となすなり

又法

礬<sup>くわ</sup>石

半<sup>くわ</sup>おし

硝<sup>くわ</sup>石

硝<sup>くわ</sup>砂

各<sup>くわ</sup>三<sup>くわ</sup>十二<sup>くわ</sup>錢

礬<sup>くわ</sup>砂

カラスカ

各<sup>くわ</sup>十<sup>くわ</sup>五<sup>くわ</sup>錢

右<sup>くわ</sup>諸<sup>くわ</sup>不<sup>くわ</sup>共<sup>くわ</sup>つ令<sup>くわ</sup>令<sup>くわ</sup>して細<sup>くわ</sup>末<sup>くわ</sup>となし其中<sup>くわ</sup>の凡<sup>くわ</sup>  
淺<sup>くわ</sup>を煎<sup>くわ</sup>り銅<sup>くわ</sup>三<sup>くわ</sup>十<sup>くわ</sup>五<sup>くわ</sup>錢<sup>くわ</sup>を加<sup>くわ</sup>て鎔<sup>くわ</sup>化<sup>くわ</sup>  
せし時<sup>くわ</sup>其<sup>くわ</sup>の混<sup>くわ</sup>色の物<sup>くわ</sup>は成<sup>くわ</sup>るなり

又法

礬石

升汞丹

各八錢

右二味を味毎に棒水にて溶化し而後  
共々混和しふれを蒸す所籠に入れて  
蒸水氣を去り其物に葡萄酒石油等  
蒸入し泡をささす度とし燻すに幾  
銅一モドを加ひ溶化しし純白也して  
五枚紙を敷き下を符にす

又法

礬石 八錢

食塩

十六錢 消石 八錢

右諸味共々交互に坩堝に細き火にてを燒  
入れし度とし燒久ゆりをさすこと  
け物なり 八錢は厚片紙を刻て溶化  
しし物とれをわくわく攪て勾  
ひ列にね近しし假鉛八錢を加し新よ  
秤を合せ溶化ししを催ひ又 純銀八錢  
わく燒きて満紅を分ししを提持しわく  
わくをさすし共々溶化ししを提持し  
錠となし貯ししこの物にを融かしし



易く色も赤くし泥を類すなり

又法

銀

板云法

右一棗垣場よりれり之熔

化し

假輪

再之方より融きて  
融る慢す者

之板假法をか

又同

糖化

精製する食塩

蓬砂

蓬砂

蓬砂

蓬砂

清石

礬石

各

錐

を加

一凡

一十

煨煉

とる

なり

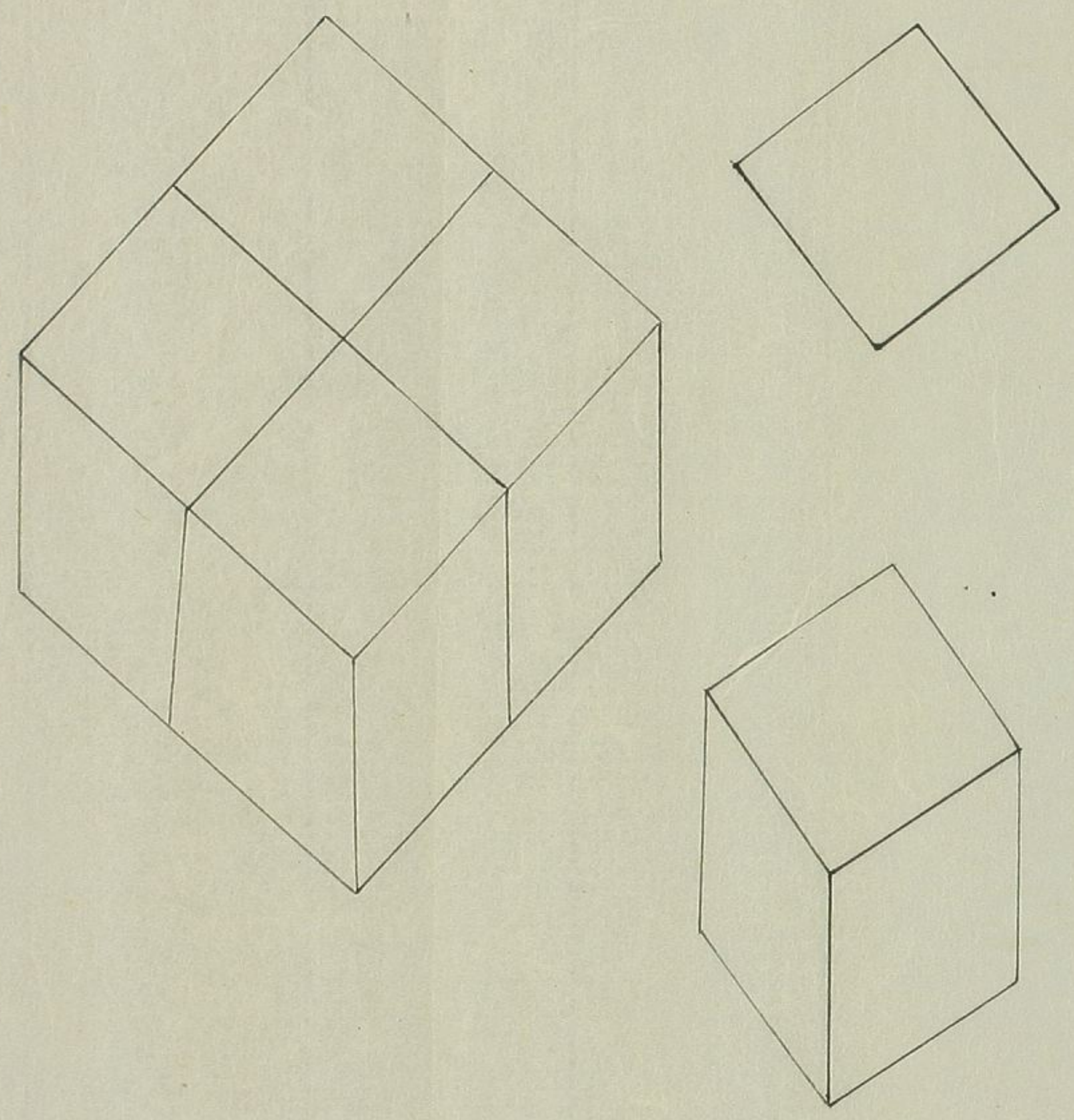
~~此法は... 此法は... 此法は...~~

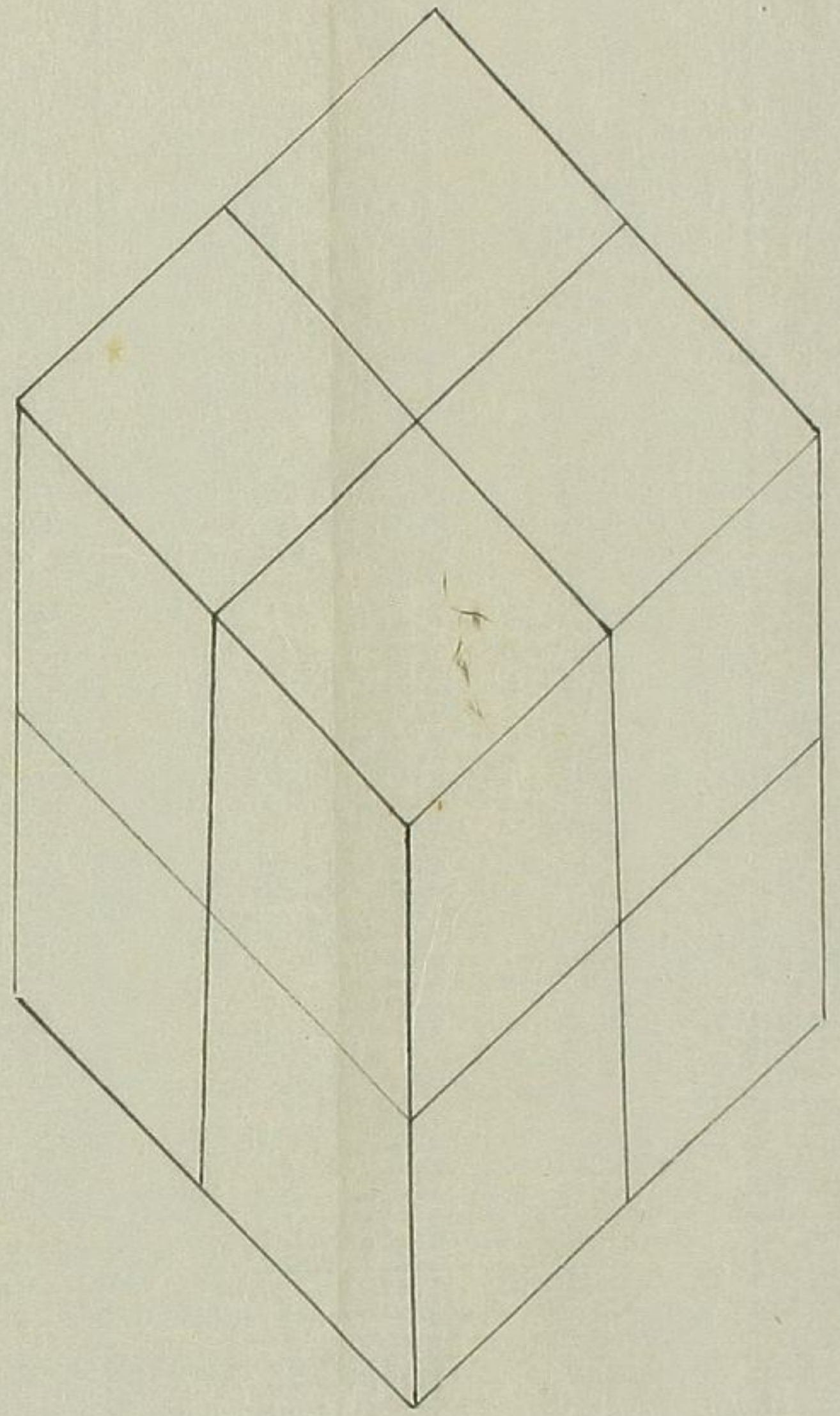
一トノ金十石ニトノ銀十其ノ量同業ノ銀  
銀ノ量銀ノ凡一量ノ銀ノ量ノ銀ノ量ノ銀ノ量  
銀ノ量ノ銀ノ量ノ銀ノ量ノ銀ノ量ノ銀ノ量ノ銀ノ量  
銀ノ量ノ銀ノ量ノ銀ノ量ノ銀ノ量ノ銀ノ量ノ銀ノ量

金ノ氣眼ト銀ノ氣眼ハ其大小ノ差一ト二ノ如シ故ニ銀  
ノ氣眼ハ金ノ氣眼ヨリ大ナル一八倍ナリ

此理假令長サ一寸ノ者ニツ乗ケルハ二寸ニノ一倍ナリ是ヲ  
方一吋平方ニノ二ヲ乗ケルハ方二吋ヲ得ルナリ即ニ二々ガ  
四ニノ四倍ナリ又方二吋ヲ立方ニノ二ヲ乗ケルハ其立  
積ニ四ガ八ニノ即八倍ナリ知ルヘシ因テコレヲ量ニテ  
測ルルハ假令ハ金ノ氣眼ニ一釐ノ物ヲ填ムベキ寸ハ  
銀ノ氣眼ニハ八釐ノ物ヲ填ムベキナリ然レハ方  
一寸ノ金ト方二寸ノ銀ト其分量同等ノ理  
ナリ

~~下ノ如ク圓板ヲ折リ一ツヤク  
何トシテ此等ノ少許所ヲ量ルル  
少許ノ誤トトモ者於テモナク~~





礦

爐其石

羅甸 ラーロリス カラミナリリス 又  
 カドミア ナチカ ヘル ホシリ区 梅カド  
 ミア 女數礦石品の名ナチカ 山自他生  
 のミ我 ヘルカ 又ナチカ ホシリ区 是發掘なり  
 あり 坑治中より得しもの体カドミア ハク  
 ナチカと名くあれと命たぬの種なり ラスヒス  
 は石なり カラミナリス 是石の布名なり  
 和蘭よりカルメイスターレーニケシメイスター  
 又カラミントスターニと名く<sup>たの</sup>布文を讀て  
 爐其石なるを名く

此物全鏡の質より追く又土質より似る

鑛石なりしを<sup>鉛</sup>重鉛と後を合む  
殊に鉛を多く含むるものあり  
其の種々ありし其の灰色なるものあり  
或は赤色あり或は白色なり  
或は黒色あり其の灰色なるものあり  
鉛は含有し赤色あり白色あり

は鉛を多く含むるものあり  
所謂蘇<sup>スエーデン</sup> 例諸山の山々あり  
市<sup>シリア</sup> 市<sup>シリア</sup> 市<sup>シリア</sup> 市<sup>シリア</sup> 市<sup>シリア</sup>  
都<sup>ド</sup> 都<sup>ド</sup> 都<sup>ド</sup> 都<sup>ド</sup> 都<sup>ド</sup>  
諸地よりあり  
此のやうなものを新は銅と云

假銅と銅をさすの料とんらぬる也  
重鉛と多し合はる。物成り最上とん  
ふれ何とぬは赤銅成る銅と多し  
しむる重鉛成り用ひて割る也  
重鉛シシキより割るし多しぬる中トニアハクチヤ 爐其石  
を加用とればなり但黄銅スエチをぬる

用るの爐其石は先般とて重鉛を吹合  
るしとて吹合つる法は銅コの條と詳  
す

至近外流の瘡法は取用を多し  
良知ありし細末と為す者は極よく  
乾燥するの功ありぬる扱酒セ樽ツ模成

此脂或、軟をなす。和烟して金創を包

と止め、湯病を貼してうへ愈法す。又ブ

リウキアリス 未詳 或、斑門或會 陰のまゝ 或、水田 の腫下注 乃、兩

膝合縫のまゝ。赤燐を灸す。病は、松末

と換ふる。必効あり。又此物膽八樹子

油或、蕪菁油或、醋と軟言ふ。和をなす

諸方あり。其方條に詳す。

此石炭燧化をその時、室内の孔に掛

着るとその形を現す。

その名をニートキット 或、ウツテカニイヤ

名く、その名を古人所謂、ポムホレイキスなり

此物、金創出血或、膿瘍の痛を和す

且よく乾く事の有効あり又い細末

油と和して眼痛を癒すに極く

痛を止む又少余細末をうらむ

成るべく眼目諸病に用ひて良効

あり

按よけ粉末羅旬ニニル又ニニルアヒ山と名く  
假箭を極く細末をうらむの團よまは既柱の  
上或る側は烟を氣度のとくを飛散りて所をよる所の  
物うらむと云れをうらむる極白極細粉をうらむ物也

諸般の眼病に亦用とすの一大良薬なり又蓋し  
癰腫に用ひて良効あり云く 貞由等按し眼目  
諸病漢醫書に燻耳石と主り云くして點化せ  
ざるなりしとの後因に云く良品なるは燻耳石  
なり他あり燻耳石は製成するに乃す金銀吹  
局の毒物の粉末とす所謂ウツテカルメトと云く  
云く同攷りして亦其功も優るなりし

又多イウといふ名は眼の書にカルメステーン其色白  
黄或赤と云く其味辛氣辛り生る多毒を二種に  
分つ其一ハ白燻耳石也一ハ黄燻耳石也其色  
赤と云く其味辛と云く又一種燻耳石は得る物  
カドニアハクナナアと名く其味辛と云く其色赤也

茂竹梅葉  
磁石様  
別標  
手印

以て黄銅と分るの料と云ふ云々  
本州細目載る新爐其石はカレニス  
テレンの譯説と略合するもの  
時珍曰爐其石所在坑冶處皆有川蜀云金  
銀之苗也其塊大小不一狀似羊脂如石脂亦  
粘舌產于金坑者其色微黃為上產於銀坑者  
其色白或帶青或帶綠或粉紅赤銅得之即變  
為黃今之黃銅皆此點化也造化指南云爐其  
石受黃金白金之氣熏陶三十年方能結成  
中野山曰爐其石八船來ニ古渡ヲ上トス新渡敷種アリ  
中品ナリ泡様ト呼フモノヲ上品トスコレ收貯年臘ト説ヒテ  
總テ白色ヲ貴フ黃色ヲ次トス云々本邦ニモ意ヲ潜ス

廣濟志篤其人アラハコレヲ米リ出ス一モアルヘキ  
ヤ舊キ長崎外科傳書ニ「ラ」ピスカラモ「  
無名異ト註セリ如何ナル由アリテヤ此無名異モ石  
見銀山ヨリ出ル者ナレハ

コバルド 羅甸コバルと名ク

以物一種の鑛石として價高く色灰或  
青灰或黒色又或ハ他の色を有セ



もろ細末とろせは灰色或將厚色也  
ろろろのれは撥を減らしてゆるる石  
或硫黄ことを含む物あり或根及ニルカ  
らト強きとろろろ合有とろろろ  
ろろろを侵蝕の性烈しとろろろなり  
故に棉紙わたいに包むとろろろろろろ

げ粉末ろろろ諸薬を殺すなり  
ろろろフリーゼンブートル  
ろろろを煖化し割るなり  
ろろろコバルドとろろろ羅甸とろろろカドニア  
ナチキハ同名異品又カドニアメタリカと補す  
ろろろ砂とポワトアスろろろとろろろ

しく煇化したるものハ其色の顔  
料<sup>ダ</sup>との名けてスマルタと云ふ而陶  
器或煇化せる画の顔料と云ふ事なり  
スマルトの條にも詳しす

サ石 サクセ<sup>ニ</sup> 獨逸都國<sup>ノ</sup>より産す其  
在<sup>ル</sup>の地名

國主の嚴禁するては製る法と詳し

鑛石のまゝとて化粧<sup>ノ</sup>ありと成す

とす<sup>ル</sup> 按<sup>テ</sup>是<sup>レ</sup>磁石<sup>ト</sup>或曰<sup>ク</sup>ギフタイ<sup>ト</sup>及  
の製<sup>ル</sup>法

ペイ<sup>シ</sup>子<sup>ノ</sup>井<sup>ス</sup> 昔<sup>々</sup>西<sup>羅</sup>巴<sup>ノ</sup>の山<sup>中</sup>より産す  
作<sup>ル</sup>の<sup>名</sup>を<sup>記</sup>す

物と名<sup>ケ</sup>り<sup>ト</sup>なり

コルカレート

け物<sup>ノ</sup>全<sup>ク</sup>質<sup>ト</sup>して<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>色<sup>を</sup>光<sup>澤</sup>ある

鐵礬黃土とのこぶ夾雜混交  
 一多し物をりて中又相の交り  
 同くありいれ銅礬とを合す  
 時よりく火焰と發す故より名を  
 互ニス<sup>石</sup>と名く

スマルタ

和蘭 グーライセルと名く  
 梅青色 アホエラダ 顔料の一種なり

①

~~和蘭  
 梅青色  
 顔料の一種なり~~

和蘭 梅青色 顔料の一種なり  
 和蘭 梅青色 顔料の一種なり  
 和蘭 梅青色 顔料の一種なり

②

貸出

貸出 借入

貸出 借入 貸出 借入

貸出

借入

コバルト

①

けおハコバルト 砂 ボットアスのニ律

和ー撥化して緋色色の硝子

作ー一両后とれを揃き末ー粉

末とる。昔色の 硝子料とる

砒石

砒黃信石

砒性極如鏡故名

近銅山處有之唯信列者佳其塊有甚大者  
 色如象牙黃顯微不雜 蘇頌市肆所賣片  
 如細屑亦夾土石 生不夾石者色赤甚于雄黃  
 今市代者取山中夾砒石者燒烟飛作白團乃  
 碎屑而甚刺其傷人多者塊大而微黃所如我  
 小色顯微者此也 和入酸毒鼠死鼠捕犬食  
 之亦死 時珍白此乃銅之苗也  
 天上同物 似土硬 似石碎 生或白或赤  
 本經道原 色白有黃 摩者名金脚砒 蘭山曰  
 有文十者 土中生 山ヲ掘テ採ルトイフ

コバルト

チリ

スマルタ

ル

砒石ハコバルト 砂 ボツトアスのニ味

和シ 糖化シテ 緋石名也の硝子

作シ 而石とれを 搗き末 粉

末と云。青色の 硝子料と云

